

「飯館村からの挑戦——自然との共生をめざして」

(田尾陽一著) を読んで思考したこと

忽那英計

2021年5月

1. 日本の公害の歴史

田中正造の言葉、「真の文明は山を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」が、この著作のすべてを現している。

公害は、人間（産業の経営者）と人間（雇用という経済的メリットを期待する従業員と地域経済興隆の恩恵を受ける地元の人達）との、それぞれの欲望から発生する。

従業員と地元の人達が、「経済的メリット」を享受するかわりに、「その産業が原因での、生活・健康上の被害」を受け、かつ、その被害を停止するには産業自体を停止せざるを得ないが、その産業が国家の経済的発展・国力の発展に必須であるために国家が容易には停止させない時に、その被害を公害という。

——産業の経営者は、「国家の経済的発展・国力の発展」に貢献していることを、「錦の旗」にしているために、容易には、産業を停止しない。

田中正造（栃木県選出の国会議員）は、1897年以降、被害を受けた地域の住民と共に陳情し、国会にて抗議、天皇に直訴までしようとしたが、産業（足尾銅山）は停止されず、結局、政府は、被害の中心地の栃木県谷中村の住民を集団移転させて廃村とする。

田中は、「これを不服とする住民」とともに、谷中村に残り、1913年に亡くなるまでそこに住んで、政府に抗議し続けた。

——日本は、鉱山の採掘をスタートに、三井・三菱・住友・日立などの財閥を産みつつ、広範な産業発展による経済発展・国力の発展を成し遂げてきた。（足尾銅山も同じ時期の問題）

田中正造と地域の住民はその犠牲と言えるが、「単なる犠牲にしない方策」が、政治・行政・社会に問われる。このことは、人類における根本問題である。

この著作は、この根本問題についての問題提起と解決策の実行（進行中）、の活動記録である。解決は容易でないので、まだ、「スタートの記録」と言える。

2011年の福島原発事故は、田中正造亡きあと約100年。

政府は、原発は国家の経済的発展・国力の発展に必須と考えて、私企業東京電力の膨大な金額の事故処理費に、多額の補助をしつつある。

まさに、原発事故による被害は、公害としての扱いである。しかも、事故処理には、膨大な金額だけでなく、膨大な年数（多分50年～100年）もかかる。

（この事故処理は、世界で初めてであり、技術的にも困難を極めつつあり、不可能となるかもしれない。）

——東京電力は、原発事故の原因となった地震と津波は、「想定外のもの」であ

り、従って、原発事故そのものも災害である、という主張をしている。

——日本の公害には、この中間に、「水俣病等（高度成長期のスタートによる、工場廃液と大気汚染による）の公害」がある。

この公害への対応は、1967年制定の公害対策基本法にて実行された。田中正造の、文字通りの「身を挺しての公害への抗議」が、約50年後にようやく、法律となり、一步前進するが、この公害も地域では悲惨を極めた。地域住民の犠牲は極めて大きかった。法律で償いきれるものではなかった。（筆者は、この時の、胸をえぐられるような思い、を忘れない）

——「化学産業のスタート」ともいえる企業が、産業の発展・国力の発展に必須、という判断での政治・行政・社会が強いた犠牲であった。（日本の高度成長期における、「企業と行政の一体化」によっておきた惨状、と言える）

2. 公害の「地球化（世界化）」と新しい道標

福島原発事故は、日本の明治以降の公害で3番目であるが、以前と異なるのは、「リスクの地球化」と「修復の困難さ（技術的にも、期間においても）」にある。人間がつくる産業は、発展しているように見えて、「それが生み出す公害が、地球・人類を滅ぼすリスク」を生み出しており、「産業の発展」といえども、リスク次第で止めるべきところにきている。

——福島原発事故は、原発事故としては世界で3番目であり、先の二つの事故も、悲惨さを極めて、未だに修復できずに隠ぺいされたままで、地球を壊したままで住民は移住している。

「地元住民が移住する」、は、根本的な解決策ではない。

もっと深刻な、地球化そのものの公害は、「地球温暖化」問題である。地球は、既に、取り返しがつかない、防ぎようがないところにまで来ている、という見解が世界中で、高まりつつある。この被害は一部の地域でなく、まさに地球全体であるために、単なる移住では解決できない危険性が高い。

——>「原発事故への対策（多分、原発を上手に停止するしかない。ドイツなどそういう判断の国が出てきている。）」と「地球温暖化対策」は、人類の「地球上での生存」をかけての究極かつ喫緊の問題である。

我々、人類は、まさにそこに直面している。しかも、残された時間は少ない。

本書の終章にある、「現在世界各国で語られる近代化の社会目標は、経済成長・科学技術振興（＝産業発展）という二つの言葉一色になっている。

これらを各国が競って追及するその先に待っているのは、直感的には文明の崩壊ではないだろうか。」という著者の思考が、著者の「ふくしま再生」の活動の原点になっている。

——これは、100年前に、田中正造が公害に対して身を挺したのと同じである。

本書の著者・田尾陽一は、家族で、東京という日本の中心の都会から飯館村に移

住した。「ふくしま再生」に、残る生涯の全てをかけていくであろう。それが、多分彼の人生の集大成、であろう。

しかし筆者は、彼が活着している間には再生は完了せず、亡きあと20年前後に「産業発展・経済発展を優先しない人類・人間の生き方」がしっかりと実現する、と予測する。そのための大きな道標になる、と筆者は、確信する。

(同時並行して、同じような道標が多発することを、期待してやまない)

——それらの道導が小さすぎる時は、地球は破壊され尽くして、人類・人間は滅亡するであろうから。

3. 現時点での、人類・人間についての筆者の思考

(1) 人類の起源とおごりの始まり

地球における生物の誕生は30億年前。当時は微生物のみ。

人類の起源は微生物で、全ての生物と同じ、である。

人類が、決して特別の生物ではないことを、肝に銘じるべき。

5億年前(カンブリア紀)に、生物に眼が誕生し、生物が多様化し食物連鎖が、スタート。(当時のカブトガニが今も生存)

人類が、類人猿(人類とチンパンジーとの共通の祖先)からチンパンジーと分岐したのが700万年前。

人類が石器を使用したのが、330万年前。ここから、「人類の道具・武器の使用」が始まる。

——>「人類が、生物の食物連鎖の頂点に立つこと」が、決まる。

それだけで、神に感謝し、全ての生物・自然に感謝し、欲望を抑制すべきなるも、おごりが330万年も継続している。

———但し、そのおごりが世界で急速に高まったのは、直近の、300年。わずか300年。

中でも、日本においては、第2次世界大戦後の高度成長の始まりからの80年弱。わずか80年。

この「80年」は、まさに、著者・筆者が生存してきた期間であるが故に、我々の責任が重い、と自覚。

著者は、その責任を果たすために、「ふくしま再生」に、身を挺した、と考える。

(2) 日本の産業の発展

1700年代に産業革命(世界的な産業の発展の開始)。

———綿の紡績機械、蒸気機関(動力)の発明

——>機械工業・鉄鋼業(機械の原料の生産)・石炭業
(蒸気機関と鉄鋼業の原料生産)の発達。

1868年が明治元年。

1926年が昭和元年。

1945年がポツダム宣言(第2次世界戦争終了)。

以後が、日本経済の高度成長期。

1980年代後半がバブル経済期。

現在は、2021年。

——産業革命から約300年。わずか300年である。
高度成長期のスタートから約80年にすぎない。

(3) 人類・人間が今後目指すべきもの

「産業発展・経済発展」は、地球・世界が有限であるので、いつまでも持続できるものではない。

——先進国の富は、先進国であるほど、発展途上国からの富（人件費等の較差を利用しての発展途上国での産業の展開と、発展途上国内におけるマーケットの拡大、において）を加算することで蓄積されてきた。（先進国の産業のグローバル化）

——発展途上国は、先進国からの産業の受け入れが、自国の産業発展・マーケットの拡大となり、自国の国力向上になるので、共存共栄の関係が成立する。

しかし、発展途上国は次第に先進国化し、残る発展途上国は減少。グローバル化による利益の蓄積は限界に達する。

——この限界の問題については、先進国のグローバル化の点だけでなく、「世界の人口の増減＝マーケットの増減」も大きくかわる。

1800年に10億人であった世界の人口は、2010年には70億人に増加した。1700年の産業革命による「産業発展・経済発展」は、この「人口急増によるマーケットの急拡大」があつてのことでもある。（日本の高度成長はまさにそう）

この世界の人口は、100億人前後がピークで、そこから減少に転ずるという予測が一般的。

そこまで増加せずに、2050年からは人口の大減少が始まる、という予測もある。

——実際に、既に25ヶ国（先進国中心）にて人口は減少しつつあり、この減少国はどんどん増加は必至。

「人口の減少によるマーケットの縮小」は、人類として初めての経験であり、人類の未来に根本的な影響を与えるであろう。

——「人口の減少」（これが今後30年にて地球全体に波及するとなれば）は、現在の地球上の問題をすべて逆転させる。

産業発展・経済発展が、縮小に転じて、地球上の公害は自然消滅し、国の破綻が続出する。

そうならば、「ふくしま再生」という活動は、壊滅するか、逆に急速に完成がやってくるか。活動の内容次第であろう。

——日本国家は、世界で飛びぬけた国家債務・財政赤字（共にコロナで急増中）、海外からの移住の実績が少ない（単一民族志向の国造り）、という問題をかかえており、先進国でも、国家破綻が、真っ先であろう。

（我々の世帯は、第2次世界大戦後から主に米国企業のグローバル化と共存共栄しつつ、自国の産業の発展・国力の強化を実現してきた。

それも50年前後で終わり（日本人の人件費の高騰と日本企業の成長にて）、以後は、日本が、「グローバル化」の名のもとに発展途上国への進出を開始。）

4. 著作の具体的な内容について

300ページ余のこの著作は、著者の10年の活動記録・叙事詩である。必ずや、続編・続々編が書かれることと思う。著者が生きている限り。記録は、広範かつ多岐にわたり、また克明で、読者を圧倒する。

——読者にも並大抵でない読書力が必要とされる。

東大農学部ほか多数の有力な大学との連携・海外との幅広い交流・著者自身の海外講演（英語での講演）など、中身が濃く、深く、この積み重ねが、いずれ、世界で、国内で大きな波となり、「この80年についての責任を果たす」ことになることを、祈念してやまない。

著作の具体的な内容の中で、筆者が特に感動したことを、以下に述べたい。

(1) 著者の人脈の原点・中核は学生時代（55年前）の仲間

著者は、幼少の頃広島で原爆の経験をした後、東京の麻布高校から東京大学へ。理学部大学院物理専攻修士課程を修了（高エネルギー加速器物理学）、まさに当時の原子力のプロ中のプロである。

その大学院時代に、東大全共闘という学生運動のリーダー的な存在であった。

——当時も、今も変わらず、人間は、学生時代に「生きることを根源的に問う思考と活動」をする。

「大学自治という広場」と、「若さをエネルギーとして語り合える学生同士の広場」があつてのことである。

全共闘の活動は、一つの大学だけではなく、全国の大学に広がり、「1年間大学入試が中止になった」くらい広くて深い活動となった。「問う内容が根源的で、深かったが故に、全国の大学に拡大し、全国的な活動・運動」となった。

残念ながら、最後は、「若い故の、思考不足と過激さが、社会で問題となり」、終息した。

しかし当時の思考そのものは根源的なものであるが故に解消することはなく、社会の中で熟成され続け、徐々に社会の変革の基になりつつある。

全共闘活動の当時は社会に過激に変革を求めたが故に、高度成長期の当時の経済・政治・社会のリーダーとは対立せざるを得なかった。

その対立が故に、全共闘のリーダー・幹部達は、普通の学生と同じ就職が困難となるが多かった。

そして、こういう学生の就職を排除した企業等の組織は、人類には間違った方向への経営になっていくことが、多かった。

——これが、「日本における、今までの80年」の問題となる。

著者においても、「就職の困難さ」を原点にして、社会生活をスタートしたことが、「普通の学生とは異なる努力の実行」・「生きることを根源的に問う思考の深化」になっていく。

また、そういうものを共有し続けた人達同士の連携・共感は、当然ながら、深くて、堅い。

離れていても、一瞬にして触発される。

この著作における、「一番感動的なところ」は、埋め込まれてはいるが、よく読めば、随所に、著者は、「元全共闘の仲間（55年も前に、同時期に活動した人達）」に奇遇し、助けられている。

まさに、著者の人脈の中核である。

（著作に書かれてはないが、支援している沢山の学生時代の仲間 がいるはず。）

——最近活動に参画の、北川フラム氏がしかり。「アートの世界」で、大きな実績を持たれており、今後の活躍が期待される。

直近では、2021年4月28日日経新聞「交遊抄」の高橋公氏。

(2) 東大工学部旧原子力工学科

著者は、福島原発事故直後（2011年4月）に、東大工学部旧原子力工学科を訪問している。

事故について、いろんなシンポジウム・ミーティングが行われているはずだと。

しかし、そこは、静寂で、教官も学生もいなかった。

———同学科は、既に数十年前に、「不人気学科」となり、志望する学生も少ないために、学科の名称さえ消えていたことを、著者は知らなかったのである。

———「原子力」の時代が日本では終わったことを、東大は認識して、現実的な対応を実行。

これは、間違っていない。

だからこそ、「原子力発電所の建設並びにメンテナンス・事故処理」についての技術開発の問題が発生しており（大学に研究室がない、ということ。また、入社する学生もいない）、企業にとって、根本的な問題である。

(3) 森林を含む除染活動と農業等の再生

政府でさえ放置した除染活動・放射線量測定を、地道に積み重ねる姿には、心を打たれる。途方もない活動・行動である。

———筆者も見学してみて茫然としたものである。

自分達でここまでやるのか。やらないといけないのか、と。

農業・畜産業・林業の再生、生活・コミュニティの再生についても、実に超人的に皆さん注力されているが、これも気が遠くなるような活動・行動であり、実際に完成するか、筆者には予測ができない。難事業の難事業だと思うから。

———大半の住民は、戻っていない。戻ってこないであろう。

特に若者は。

これが、10年経過しての現実である。

(4) 「ふくしま再生の会」の報告会

会場・出席メンバー・対話方法、のいずれにおいても、実に有意義に開催されており、見事である。

記録内容から、「再生への道程」が、目に見えるように感じる。

(5) 2015年10月著者の、ワシントン・ジョージタウンでの会議（世界から100人以上集合）での講演

「日本とは違う大変オープンな会議」と記録されているように、実にオープンな雰囲気を感じる。

だからであろうが、著者の福島原発事故に対する憤りと本音が、十分に語られている。

———「巨大な被害に対し、誰も責任を取らない。被害者にはあきらめてもらう、という政策が取られているが、これは間違いだと思う。・・・・・・・・・・・・・・・・・・

避難後に関連死1500人がすでに出ていて増加中だ。」

5. 「ふくしま再生」(飯舘村)の未来

(1) 2020年8月オンラインオープンコンファレンスの記録

A. 原発事故後の現状

約20%の高齢者しか帰村していない。若者が戻ってこない。

放射能・放射線がまだ残っていて危険

——2021年3月7日テレビ放映(福島原発事故)

流出した放射能の2%が近隣を汚染。

98%は原発近辺に滞留中。

住民の65%は戻らない、と、予測。

主産業の農林畜産業が回復していない。

村面積の75%を占める森林の再生が手つかずの状況

B. 討論項目(再生をめざすために)

帰村への希望が湧く村、移住したい・滞在した気持ちが湧き上がる村、をつくりたい。

飯舘村に住む・滞在するにはどんな形で

安全・安心の村にする活動

食糧やエネルギーを自給できる美しい村にする活動

飯舘村はまだまだ、の現状の中で、討論項目には、自然と人間との共生の中で、外部の様々な支援者・協力者と協働しつつ、再生していく未来(目指すべきもの)が列挙されている。

(2) 「未来実現」についての筆者の思考

A. 日本での、「今までの80年(高度成長とその延長)」は、地方での生活者が、都会(特に東京)での仕事を目指して都会に集中した時代。地方での生活(農業などの一次産業、あるいはサラリーマンでも給料が安い家)が貧乏で苦しいために、都会に稼ぎに出た時代。

B. 現在の農林畜産業(漁業も含めて、地方の一次産業)は、80年前よりも、都会での仕事に比べての収入比較は、何倍も較差が拡大している。(正確なデータを持っていないが、実感として)

だから、「耕作地放棄」が、大きな問題となってきつつある。

若者は都会に出て、後継者がいない、は、深刻な実情。

また、農協を廃止して、「農業は企業経営へ」が、議論されつつある。

——実際に、日本の農業は、零細すぎて、外国に比べて効率が悪いいためコストが高く、外国からの輸入に対抗できないために、食料の自給率が日本は極端に低い。

C. このような現状で、しかも放射能汚染というハンディキャップを持ちながら、飯舘村の農林畜産業が成功するであろうか。

———筆者は、「まさに、四国の貧農で生活でないが故に都会に稼ぎに出た者」であるが故に、特に懸念を持ち続けている。

D. 未来を実現する条件（筆者の想定）

———A・B・Cを、徹底して、国内外において払拭すべし。
そのために、以下の項目の実現。

農林畜産業を大規模化。生産の効率化。

———帰村者が少数だから大規模化が可能。大企業に頼るのでではなく、個人中心での大規模化の実現。

（米国などでは、個人で大規模化を実現済み）

———放射能というハンディキャップを逆手にとる。

村全体を、「白地に絵を描くように」、自由にできるのだから、「村の魅力」を、地方では別格に創りあげる。

———特に、「アート・芸術と愛（人間同士・人間と自然）」という人間・人類に一番大切なもの（感動を与えあうもの＝人間だけにできること）が、あふれる村づくりをする。

そうすれば、国内・国外からも移住者・滞在者が来る。

特に、若者が来る。

農林畜産業以外の産業・仕事を創る。農林畜産業関連も含めて。

（但し、自然との共生に適した産業・仕事であることが必須）

———特に若者がやりたい仕事を。

いろんな会合・交流会、学校・体験の場、いろんな祭り等（老若男女・国内外、が集まるもの）をやる。世界一楽しい村にする。

———土地はいっぱいあるのだから、やれる。

村の行政を、「理想の行政（全国・世界での模範）」として構築。

———日本の政治は、地方・末端から変えるべし。（それが王道）

それを、全国・世界に広げる。広げてこそ、飯館村の力になる。

「ふくしま再生の会」（NPO）への寄付を、「用途を明確にして」、用途別に沢山集める。国内外から、持続的に。

最後に、一番重要な項目

現在、世界中がコロナで困難を極めていることを逆手にとる。

大変難しいであろうが、チャンスである。

———コロナとも共生できる村づくりを実行。

全員、常時PCR検査体制をつくる。（村に出入りする人は全て）
全員ワクチンを接種。

全員、体温の1日3回測定・データ化し、公表等

地方自治体でどこもやれない感染予防策を、徹底し実行。

(人口が少ないからこそやれる)
独自の病院・医療体制を構築。
——コロナ感染者に対してだけでなく、医療全般に対して。
(協力する医者・病院等の確保)

「コロナに対して世界一安心・安全」が実現できれば、移住希望者が世界中から殺到して来るはず。いろんな技術を持った人が特に。
——村の人口が増えすぎないように、厳選して移住を制限せざるを得ないかも。
その時は、飯舘村の近隣過疎地に活動を拡大か。

以上の兆しは、2020年8月オンラインオープンコンファランスにほぼ盛られており(コロナとの共生、以外は)、著者は既に着実な実行スケジュールを準備していることであろう、と考える。

以上